

序言

藤田亮策

奈良国立文化財研究所は発足以来八ヶ年、研究事業も着々と進行し、研究成果の刊行されて学界を裨益したのも少なくない。また豊富な古文化財の中心地にあるために、その調査と保存とに寄与して来た点も人の知るところである。これについては一九五八年年報に詳細に報告されて居り、新しい研究報告の一端も紹介されて、本研究所の性格そのものも明になつたことと思う。

文化財保護委員会が東京・京都・奈良の三国立博物館を擁し、東京国立文化財研究所を附属機関とする外に、特に奈良に研究所を新設するに至つたことは、奈良が日本古文化成立の中心部に当り、正倉院・七大寺を始め・飛鳥・平城・平安の各時代の遺跡に取り囲まれていたことを意識したためである。近畿地方の国宝・重要文化財及び史跡の数が、日本全土に於ける分布の半数以上を占めることは、有力にそのことを物語っている。即ち、この古文化財の中心地に在つて、直接これらのものの研究調査を行い、その保存に貢献する目的を以て、奈良文化財研究所は設置されたことを信じて疑わない。

奈良の研究所がその好位置を十分に利用し、当初の目的に邁進していることは、従来発表されて来た業績で知ることができる。ただ設立の規模が余りにも小さく、研究員の数も僅少であり、従つて研究費に乏しく、諸社寺及び地方公共団体の援助により研究を進め、研究員自らそのために奔走する有様にあることは遺憾である。研究題目と研究資料とは無尽蔵と言つてよく、調査の進行に従い新発見相次ぎ、現状ではこれを処理するに足る研究態勢を整えることは困難である。仍て

今後は全研究員の専門知識を動員して、一つ一つの古社寺または遺跡に対して総合的に協同研究を進めることが考えられて居り、既に一部実行されている。

昭和二十九年の平城宮址発掘調査を契機として、国の計画による遺跡の発掘に本研究所が調査団を組織して當つて来たことは、日本に於いては劃期的の事実である。飛鳥寺・川原寺等の規模の大きい調査は、国費による国家的事業であるために漸く成果を納めたと言つてよい。

昭和三十四年度から五ヶ年を以て、新に平城宮址の全面的発掘調査を計画したことは、我が国に於ける最初にして最大の発掘事業で、本研究所の負わされた責任は重大である。幸にして初年度の調査は、官民の全面的協力により成功を納め得たが、次年度以降の広大の面積の調査は至難の業であり、實際上十年乃至十五年の継続施行が必要である。

また正しく平城宮の方位・配置・範囲を知る為めには、単に宮址の発掘に止らず、七大寺その他の正確の坪割と条里との関係を明かにし、藤原・難波・長岡・平安各宮址の調査の結果をも十分に参照することが要求される。平城宮址の調査を助ける意味からも、奈良の研究所はその総力を挙げて、七大寺十八社の古社寺の総合研究を行うべきであるとする考は正しい。乏しい経費と僅かの研究員とでこれを如何にして処理してゆくかが今後の重大の問題で、要は合理的の調査と総員の融和協力以外に道はないと思う。

本書に載せられた研究記事は一九五八年度に行われた調査の概要であつて、詳細の研究報告は別にそれぞれ発表される予定である。